



Twitter Novels

Feb 2011 Haluhill

大学入試の試験会場で試験官が説明を始めた。「ケータイ持込自由です。試験時間中にネットの質問サイトを利用してもOKです。うちの大学の問題は、暗記した知識を問うものではありません。ネットで検索して答えの出る問題は出していません。じっくり考えた思考の軌跡を書いて下さい」

日本全国に牛の口蹄疫が蔓延した後、鳥インフルエンザが流行、その後ついに富士山が噴火して大爆発。日本が何かに崇られているのではないかという非科学的迷信が、テレビのニュースにまで出るようになった。富士山の火山灰は、殺処分によって家畜のいなくなった農場に降り注いだ。

国道からガソリンスタンドが消えた。水道から飲める水が出なくなかった。ガスをつけても、火が出なくなかった。よく停電するようになった。それでも、生き残った僕たちの生活は幸せだった。

大相撲八百長問題で春場所開催が中止になった。警察は続いて、日本人全員の携帯電話のメール記録を調べ出した。不倫、カンニング、いじめ、企業の不正取引、官僚と政治家と企業の癒着などが、次々と明らかになった。日本全国八百長だらけとわかったが、結局情報は非公開とされた。

昔々ある国に、政治とカネの問題にゆれた政治家がいました。党首選に敗れた後、彼は「これからは一兵卒としてやっていく」と言いました。リーダーが彼に色々要求しても、彼は全部反対します。彼はリーダーの言うことを全く聞かない、頑固な一兵卒となっていました。おしまい。

就職の面接に行った。面接官はゾンビだった。「グローバルに活躍する人材を求めています」腐臭にまみれたゾンビたちに言われても説得力はない。けれど僕自身もう何社も面接を落ちているので、就職ゾンビ学生みたいになっている。日本がゾンビになっている。ここはゾンビの国ですか？

中東諸国では反政府デモが広がっているが、北朝鮮や日本で反政府デモが起きる気配はない。日本ではデモが起きる代わりに、火山が噴火したり、鳥インフルエンザが流行ったり、バレンタインに刺殺事件が起きたりしている。私はバレンタインの日、灰を浴びながら、病んだ鶏を抱きしめた。

世界中で大雪が降り積もりました。積雪は世界平均で3000メートル。ほとんどみんな死んじゃったし、兵器も暴力も雪の下に埋もれてしまいました。世界は平和になりました。

ホームレスのおじいさんとキスをしました。その後、2月になっても就職活動が続けている大学4年生の男の子とキスをしました。その後、鳥インフルエンザに感染した鶏とキスをしました。その後、降り積もる雪の中で眠りました。

朝の通勤電車に乗りこむ。電車の中は、鳥小屋になっていた。狭い鳥小屋に鶏が密集している。気分が悪くなったので、途中の駅で降りた。ネットカフェに入る。薄暗いネットカフェの個室もまた、鶏小屋になっていた。腹が減ったので、牛丼屋に入った。カウンターには鶏が並んでいた。

ファストフードのどんぶりチェーン店で、親子丼を注文した。注文後、1分と経たないうちに親子丼が出てきた。「親鳥の肉と子どもの卵を混ぜ合わせて、親子丼を作りました」と、店員さんが説明してくれた。僕は親子丼を食べる気がしなくなったので、牛乳を注文した。

昔々あるところで、インフルエンザが流行しました。感染力が強く、感染者はみな死亡するので、政府はインフルエンザ発生地域を閉鎖し、地域の住民を皆殺しにしました。皆殺しという表現がきついで、殺処分という政治的に適切な表現が選ばれました。人も家畜も殺処分されました。おしまい。

中国から上野動物園にやってきた二頭のパンダは、安売り牛丼に使われている中国産の牛肉と一緒に日本に運ばれた。「牛さんみんな殺されちゃったけど、僕たち生きたまま日本に入れるね」オスのパンダがつぶやく。「バカ、私たちも檻に入れられてんのよ」ツンデレのメスがリプライした。

日本にやってきた二頭のパンダのうち、オスの方は、特殊メイクでパンダに扮した人間だった。彼は中国政府の密使として、日本にやってきた。日本政府首脳と密約を結ぶのが彼の使命だ。中東で起きた反政府デモの波は、中国にも浸透しようとしている。パンダの密使はデモを嫌悪していた。

「お父さん、私はどうして生まれたの？」 「グーグルで検索しなさい」 「お母さん、さびしいから話し相手して」 「ツイッターでつぶやいてなさい」 「お兄ちゃん、ゲームの相手して」 「ネットで対戦相手見つけろよ」 こう言われ続けた妹は、家にいながら、世界中の人とつながる道を選んだ。

「鳥インフルエンザが発覚したからって、鳥何万羽も殺処分って、地球人は本当に野蛮だな。鳥食ってるだけでひどい話だけど」
僕の部屋に暮らす宇宙人のアホ王子がつぶやいた。王子の星でも千年前、地球と同じように鳥を殺していたという。今からすれば、考えられないむごい話だそう。

家に帰ったら、お母さんが二つに分裂していた。リビングに入る。お父さんも二つに分裂していた。僕の妻も、娘も二つに分裂している。分裂していないのは、僕だけだった。家族で話し合いをした結果、この際家も二つに分裂させようと決まった。僕は真ん中から引き裂かれるのだろうか。

新宿のプリンスホテル前を歩いていたら、向こうから男女の集団が歩いてきた。二十代の男女が30人ほど、全員裸で歩道を歩いてくる。みんな手に携帯電話を持って、液晶画面を見つめている。互いに話はしていない。僕はプリンスホテルの壁際に立って、裸の集団をやり過ごした。

目の前にバニーガールとタートルガールが現れた。タートルガールとは、ノースリーブのタートルネックを着ている女性のことである、と定義しておく。「バニーとタートルならどちらの生き方を選びますか？」と市場競争の神様に質問された。「タートルガールでいきます」と私は宣言した。

1日1分だけ祈っていた人が、1日1時間祈るようにしてみた。1日1分だけ勉強していた人も、1日1時間勉強するようにしてみた。1日1分だけキスしていた人も、1日1時間抱擁してキスするようにしてみた。1つのことを60倍にしただけで、世界の収益が改善した。

疲れた時はどうすればいいか、音楽の先生に聞いてみた。「予定を入れすぎないことです。本当にやる必要のないことを予定に入れないことです」予定を空にしてみた。やりたいこと、やるべきことのうち、本当にやる必要のないことは全部捨ててみた。すると、痛みが治まった。

誰かを幸せにするために生きているわけではないけれど、自分でやろうと思えば、誰かを幸せにするために生きていくこともできる。成功するための道のりは、長く険しいだろうが、誰かを幸せにするために生きていくことは、成功するよりもたやすい。

過去の失敗は、現在の自分とつながっていない。現在の自分は現在の自分。過去の自分は、過去の自分。二つの自分は別の存在。引きずる必要はない。

何が自分の人生にとって本当に大切なのか？ よくよく考えてみれば、実につまらないことを毎日繰り返していることに気づく。必要ないことで悩み、喜び、傷ついている。

私生活に不満が満ちている人は、批判ばかりする。私生活が満ち足りている人は、幸福だから批判しないのか、不正をも受容するのか。違う。満ち足りた人は、不満を述べず、問題の解決策を考え、提案するだろう。

普遍的に、万人に妥当する正義も価値も世界には存在しない。だからといって、絶望し、沈黙しているわけにもいかない。自分自身の意見の正しさを主張する人に懐疑のまなざしを向けていこう。本当にそれを実行したら、世界が幸せになるのかと問い続けよう。価値の多様性を守るために。

自分が不幸な原因は、全て社会のせいだとする。その社会は、誰か人間が作り出したものだ。自分一人の力では立ち向かえないとしても、協力者を募れば、社会の仕組みを変えていくことができる。絶望する必要はない。

大きな仕事を任されることの対価として、何でも願いがひとつだけ叶う労働契約を結ぶとする。普通の人には給料を要求する。魔法少女の君は、仕事の対価として何を願うのか？

朝日のニュースサイトによると、大雪によって死んだ人間は、日本国内で81人いるらしいけれど、牛、豚、鳥などの家畜で死んだ動物は、19万頭・羽に上るといふ。桁が違ふ。愛知県が鳥インフルエンザで殺処分した鶏は14万羽。どれだけ殺してるんだという話。

今日食べたものに1分間の感謝をしてから、眠りにつく。今日亡くなったものたち、今日生まれたものたち、今日生き続けているものたちに感謝の言葉を捧げてから、眠りにつく。人間も動物も植物もバクテリアも、全てのものたちに1分間の感謝を捧げる。翌朝、私は与えられた恵みの生を続ける。

ビーフシチューに入っている牛肉を見て、牛さんの命に申し訳ないことをしたなと思うベジタリアンがいるとする。ビーフシチューの中に入っている玉ねぎ、人参などの野菜も、牛さん同様に命である。雑食動物である僕は、動物の命と植物の命、両方に感謝したい、公平に、平等に。

おじいさんが3人、カウンターに並んで牛丼を食べている。牛丼一杯240円。おじいさんたちが食べている牛丼に入っている牛肉は、殺処分されなかった家畜の牛肉。どこか遠くの国で育てられた牛さんのお肉。一杯240円でも命の恵みに感謝し、明日も生きていこう。

春昼の超短編ツイッター小説～2011年2月のツイート

<http://p.booklog.jp/book/22550>

著者：春昼

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/feltmail/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22550>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22550>